

高田 蛭汀（たかだ・けいてい）

1、プロフィール

県内の多くの同人誌に中核として参加し、大正期以後の県歌壇に大きな足跡を残した歌人。

<生没>

1894(明治 27)年1月 16 日 ~ 1949(昭和 24)年 12 月 18 日

<代表作>

歌集『山苺』『落葉松』

<青森との関わり>

青森の安方町に生まれ、北金沢や南郡田舎館村などに居住した。

2、作家解説

明治 27 年に父善作、母ちよの二男として青森に生まれた。本名孝一郎、幼名は啓一郎といった。浦町高等小学校卒業後、米町の渡辺佐助味噌醤油屋に奉公する。

年季が明けた大正6年に結婚し、味噌醤油の行商をしたが病気で二度も妻を失うなどの不幸がつづいた。昭和4年、稲葉てると結婚して日用品店を経営し、やがて青函連絡船用タグボート船長となる。戦災で焼け出されてからは浅虫の友人宅や妻の実家に転居し、田舎館村畑中郵便局の仕事を手伝ったが、妻の実家で病没した。

蛭汀が短歌を作ったのは大正元年だった。主人筋の慶応義塾の学生渡辺砂丘の影響である。作品は青森の雑誌「東北」に発表した。同誌終刊後の大正3年に仲間と「はまなす」を創刊した。大柄で骨太な外貌に似合わぬ叙情豊かな短歌を詠み、雑誌発行にも力をつくした。故郷を捨てて上京する仲間の多い時代、雑誌発行の苦労は多く、短歌誌として大きな働きをした同誌も、大正6年に若山牧水の「創作」と合併廃刊した。

「創作」をはじめ中央誌にも蛭汀は作品を発表したが、大正から昭和初期にかけて誕生したおびただしい数の県内同人誌に積極的に参加し、県歌壇隆盛に力をつくした。歌集としては大正10年の黎明双書『山莓』、昭和5年に座標社から出た『落葉松』があるが、初期の哀傷的歌風から次第に現実を直視した沈着な歌いぶりとなって評価された。なお、蛭汀は公淳と号して仮名書道の作家としても良い作品を残している。

3、資料紹介

○『落葉松』

図書

1930(昭和5)年9月20日

180mm×120mm

『山莓』につづく第二歌集。序文和田山蘭。「悲しみごと」「白雪」「秋風の声」「桜咲く頃」「竹の稚葉」の五章からなる。大正2年から昭和4年までの450首が収められ、一部は『山莓』と重複する。自分と自分を取り巻く生活環境がよく表れた自画像である。